

## 講式譜本における長短記号

浅田 健太郎

はじめに

声明譜は詞章、節博士、記号など、様々な要素から構成される。従来から国語史研究においては、これらの様々な要素が言語的な特徴を反映している点に関心が示され、アクセントの復元や音価の再構に利用されてきた。

筆者はこのような試みの一つとして、短音記号「火」の実態を報告したことがある（浅田、一九九九）。しかしながら先稿では、字音直読の声明譜を中心に検討したため、日本語で唱えられる譜における短音記号や長音記号については、ほとんど触れるところがなかった。本稿では講式の譜本を中心に、他の日本語声明（教化、讃嘆など）にも若干目を配りながら、そこに現れる長短記号を観察し、譜本におけるその変遷を明らかにする。さらに、譜本を構成する長短記号が、言語的な特徴を反映するかどうかという点を改めて確認してみたい。

### 一 長短記号の変遷

声明はその詞章の種類によって、梵語のもの、中国語のもの、日本語のもの<sup>(1)</sup>の3つの種類に分けられる。岩原（一九九七）では日本語で唱える声明をさらに「読む声明」と「語る声明」とに分ける<sup>(2)</sup>。まずこのうち、日本語の声明である表白、祭文、講式、和讃などを広く見渡し、長短記号がどのような種類の譜本でどのような語種に対して付されてきたのかという点を、歴史的な観点から見ていく。

近年講式譜本の大規模な公開がなされ、多くの資料から用例を収集できる環境が整ってきた。本稿では、管見に入っ

た日本語で唱える声明の譜本を対象とし<sup>(3)</sup>、短音記号（「火」「短」「消」）、長音記号（「引」「延」「持」「長」<sup>(4)</sup>）の使用状況を調査した（節博士を含まない、詞章のみの講式等は調査対象としない）。以後、資料名には適宜略称を用いるが、略称の一字目に所蔵もしくは版行の年号から一字を、二字目に書名から一字（『高野山講式集』の場合は部立てと番号）を配する。詳しくは巻末に掲げた調査資料をご参照いただきたい。

調査資料152点のうち、何らかの長短記号が観察されたものは71点であった。長短記号が見られた資料のみリストにし、本稿の末尾に調査資料として示す。今、それらの記号を時代別に集計すると、表1の通りとなる。

まず短音記号について、その概略を述べる。

#### 【鎌倉時代】

鎌倉時代において、日本語で唱える声明への施譜は字音直読の声明や梵語声明に比して少なく、天台宗系統の譜本では舍利讚嘆、百石讚などに、真言宗系統の譜本では祭文に節博士がわずかに見られるに留まる。これら

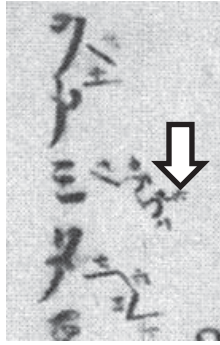
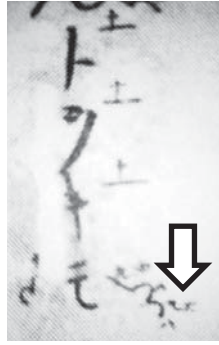
は後に隆盛する講式譜とは異なり、本行の一字ごとに一本の節博士を用いてその音程を示すという方式を採っている。この方式は字音直読の声明の譜本で使用されているもので、それが日本語で唱える声明の譜に適用されたものと考えられる。これらの講式以外の譜本に見られる記号については、以後別に扱うこととする。

短音系の記号は、室町時代までは「火」のみ見られ、他の記号は見当たらない。鎌倉時代の「火」は天台宗の讚嘆の譜において使用されているもので、節博士と同様、これも字音直読の声明で使用される記譜法から導入されたものであろう。以下に例を挙げる（長短記号が付される部分に傍線を施す）。

表1 時代別長短記号の頻度

記号種類 \ 時代	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代	江戸時代	計
火	32	23	61	357	472
短	0	0	0	179	179
消	0	0	0	5	5
短音記号 計	32	23	61	541	656
引	0	4	2	34	40
延	0	0	1	18	19
持	0	0	8	280	288
長	0	0	0	51	52
長音記号 計	0	0	9	349	359

図1 金沢文庫藏聖宣本声明集(金沢文庫資料全書 第八巻)より転載)



トヲキモ、ヲカミタテマツル、昔ニモ〔金集・舍利讃嘆〕  
水クミ〔前類・法華讃嘆〕、オカミタテマツル、ハナル、ヤ〔前類・舍利讃嘆〕  
これらの例においては全て、該当する音節に付された節博士の一部に対して「火」が施されている(図1参照。該当する長短記号を矢印にて示す)。

また、図1に示すように「火」は、しばしば同じ旋律を示す節博士の同一部分に付される。例えば、図1右の「トヲキモ」の節博士の「九(音階名)の右脇に付されている「火」は、図1左の「ヲカミタテマツル」に見られる同じ形の節博士でも使用されている。このように同じ旋律型の同じ部分に「火」が付されるのは、節博士のみで表現しきれない旋律の詳細な姿を「火」によって描写しようとしたためだと解釈できる。すなわちこのような場合では、旋律の正確な描写を目的として使用されているため、「火」が付された意図として言語上・音声上の条件は無関係であると考えられ、純粹に音楽的な要請によって付されたものであると判断する。

#### 【南北朝時代】

南北朝時代になると、天台宗では教化において、節博士ではなく本行の字に直接付されるものが出てくる。

サ火リケ火レ、キク火ノ、コソ火アリケ火レ、ケカカサ火レス火シ火テ〔勝集・教化〕

これらの教化における「火」については、本行の字と字の間に付され、節博士ではなく仮名に直接付されるという特徴があり、恐らく二字の間を早く移るといった意味合いを持つていると考えられる<sup>5)</sup>。天台宗においては、片仮名交じり文による譜本において使用され、和語を中心に付されている。

一方真言宗では、表白に使用された節博士に「火」を付したのが見られる。これらも前代の天台宗におけるものと同様に、字音で唱える声明の記譜法を踏襲するものと見られるが、片仮名交じり文でなく、漢文を基調とする譜本（訓点を施した漢文に節博士を付けたもの。一部片仮名交じり）で使用されており、和語もわずかに見られるが、漢語がほとんどである。

金剛、曼荼羅、境界、傳テ〔随理・表白〕

さらに真言宗ではこれらの他に、講式の譜本にも短音記号が見られるようになる。その早いものは、上野学園日本音楽史研究所蔵『涅槃講式』と東京大学国語研究室蔵『大慈院本涅槃講式』（図2）に見える「火」である。次に例を示す。

図2 東京大学国語研究室蔵  
『大慈院本涅槃講式』（東京大学  
国語研究室資料叢書（15）古訓  
點資料集（一）より転載）

沙羅（節博士に火）〔東大〕、不可説々々々〔上涅槃〕〔々々〕字左傍に「火」

注意すべきなのは、これらはいずれも講式の冒頭の部分であり、金田一（二九六四）の言う「A様式」の記譜法を取っていることである。「A様式」とは、本行の式文の漢字一字に対して一本の墨譜を充当させるやり方（以下非分割式）であり、漢字の読みをモーラごとに区切り、各モーラに一本の節博士を充てる「B様式」（以下モーラ分割式、図3・4を参照）に対する節博士使用の方法である。

いづれにしても、これらの例は漢語であり、字音声明で行われてきた非分割式を踏襲しているという点は、先程紹介した表白と同じである。先稿において指摘したような、字音声明譜における「火」の使用を、講式の漢語部分に援用したと見ることがができる。



よって真言宗においては、天台宗とは異なり、漢文の中で漢語に対して使用されている点特徴的であると言える。

#### 【室町時代以後】

室町時代以後、天台宗の譜本は前代までと同様の様相を維持するが、一方で真言宗の講式譜本が多く見られるようになる。その記譜法としては、漢語に声点あるいは非分割式の節博士を用い、和語に非分割式とモーラ分割式を併用する方式が一般化する。江戸時代に入ると漢語も和語も全てモーラ分割式で通ずる譜本も現れる。

そのように真言宗講式の記譜法が整備されていく中で、南北朝時代における「火」は漢語に付された非分割式の節博士に施されるものであったが、室町時代に入るとモーラ分割式の節博士、あるいは振仮名自体に「火」が使用されるようになり、語種も和語が多くなる。さらに江戸時代に入ると、「短」および「消」が新しく使用されるようになる。次に長音記号の概略にも簡単に触れる。

#### 【南北朝時代】

長音記号の中では、「引」がもっとも古いが、短音記号の「火」より遅れて南北朝時代の譜本に見られるものが初出である。すなわち、日本語で唱える声明の譜においては、まず短音記号が現れ、その後長音記号が遅れて使用されるようになった。

真言宗系統では、先引の南北朝時代写の上野学園日本音楽史研究所蔵『涅槃講式』に、「一々」という例が見られる。漢語に対して付されたこの例では、「一」字の左側に「引」が付されている。天台宗系統では、隨心院蔵『佛名會法則』(第65函45号)、勝林院蔵『聲明集(二巻抄)』に見られるものが早い。和語に付されたものもあれば、漢語に付されたものもある。

悲シムト、漏タルコトヲ〔随佛・廻向詞〕、菊キク〔勝集・教化〕、一ス〔上涅槃〕

これらのうち、「菊」の例のみが仮名に付され、残りは節博士に付されている。

## 【室町時代以降】

室町時代に入ると、真言宗の講式譜の隆盛のなかで、「延」持が新しく使用されるようになった。江戸時代では「長」が多く使用された。徐々に記号の種類が増えていき、江戸時代に至って四種の記号が使用される。このうち「延」については、他の記号に比べて、漢語に使用される割合が高い（全19例のうち13例が漢語<sup>6)</sup>）が、他の三種の記号については機能上の相違は見出せない。以下に室町時代の例を示す（括弧内は記号の種類）。

可<sup>キ</sup>（持）〔上弁〕、以降<sup>コノカタ</sup>（持）、壺<sup>サラン</sup>（持）、楽<sup>ト</sup>（持）、等<sup>ヲ</sup>（持）〔高如1〕、者<sup>トイハ</sup>（引）、林<sup>ニ</sup>（引）、  
敬<sup>テ</sup>（持）、称<sup>ス</sup>（持）、利<sup>ヘ</sup>（持）〔高四52〕、長<sup>平</sup>（延）〔高神6〕、

これらを見ると、多くが和語の句末の部分に付されている。これは音楽的な装飾が句末に現れやすく、それが譜に反映していると見ることができよう。また、室町時代に入ると真言宗では講式譜本が隆盛していき、南北朝時代には4例中1例のみが講式譜における使用であったが、室町時代では11例の全てが講式において使用されたものであった。

講式を中心に句末で多く使用されるという長音記号の傾向は、江戸時代に入るとさらに極端になっていき、長音記号が句末に現れるのは383例中258例にのぼる。以上、時代ごとに長短記号を概観し、次のことが明らかとなった。

・短音記号は、天台宗系統の譜本では鎌倉時代から使用例があり、讚嘆など、片仮名交じり文の譜本において和語を中心に使用される。真言宗系統の譜本では南北朝時代から使用例があり、漢文を訓読する声明において当初は漢語から使用され始めたが、室町時代以後に和語に波及していった。

・長音記号は、その歴史は短音記号よりも浅く、真言宗系統、天台宗系統とも南北朝時代から見られる。「延」については漢語に使用されやすいという傾向が見られる。全体として講式を中心に句末で多く使用される。

・同じ旋律型での同じ位置への施注、句末への集中から、短音記号の場合も長音記号の場合も、音楽上の要請によって記号が付された例が指摘でき、音楽上の要請によって付される場合が基本的用法であると確認できる。

## 二 短音記号と母音の無声化に関する先行研究

前節において、日本語で唱える声明の譜本における長短記号は、音楽上の旋律を細かに指定する機能を果していることを示した。しかしながら一方で、短音記号を母音の無声化の反映として解釈した論がある。

金井（一九八三）では四座講式の版本（寛永十七年版、明暦二年版、貞享三年版、元禄十二年版、宝暦版、大正版）を資料として「火」「ケス」「短」について考察した結果、「火」「ケス」が母音の無声化を反映していると結論づけた。

その論証の概要を示すと、まず無声子音には含まれた狭い母音に注記された短音記号を取り出したうえで、その特徴として（a）注記された音の次に広い母音の来ている例が約九割を占めていること、（b）無声摩擦音が先行し、無声破裂音が後続する、そのような母音を含む音に注記された例が約八割を占めていること、の二点を指摘した。この二つの特徴が従来指摘されてきた母音の無声化の生じやすい条件と一致していること、また長音記号「モツ」が母音の無声化の生じやすい環境に現れないことから、短音記号が母音の無声化を反映していると見る。

ただし、この研究では「無声子音には含まれた狭い母音に注記された」例の特徴の記述に重点が置かれ、それが「それ以外の音に注記された」例とどのように異なるのか、という点が明確に示されていない。またどこについた記号であるかが見分けがたいもの、同じ箇所にも、版本によって長・短相反する注記の見えるもの、一字一音と対応する「二重の」記号がついているものをあらかじめ調査対象から除いて考察を行っており、資料も『四座講式』の少数の刊本を対象としたものである。

よって本稿では、「火」が無声化を反映しているという解釈の蓋然性をより高めるために、さらに次の点を確認したい。

- (一) 四座講式だけでなく、その他の多くの講式譜本でも同じ特徴が取り出せるか。
- (二) 手続きとして最初から多くの例を除かなくても同じ特徴が取り出せるか。
- (三) 無声子音に挟まれた狭母音と、同じ環境に置かれた非狭母音を比べても同じ特徴が取り出せるか。

### 三 長短記号が付される単位による分類

先の調査によって、長短記号が音楽上の要請によって付されている場合のあることが確認できたため、以下で考えるべき問題は、音楽的な条件で付される長短記号の他に、言語的な条件によって付される長短記号があるのかどうかという点が焦点となる。そこで、記号がどのような言語上の単位に対して付されているかという観点から分類を行った上で、母音の無声化との関係について検討を行いたい。講式譜本から収集した長短記号を、次のAからEに分類する。

#### A 旋律の一部に対して付された長短記号

先程図1および図2で示したように、節博士の一部や音階名に対して付されている場合、それは旋律の一部分の長短を示すものと考えられる。節博士によって示される特定の音階は、節博士の長さによってある程度の長短を示すことが可能であろうが、より詳細な長短の指定を行う場合は長短記号に頼ることになる。

ここに分類するものは、基本的に一つの節博士が長く、記号の位置に意味があると判断できる非分割式の節博士に付される場合で、これらは節博士の一部分への注と考える。しかしながら図3のように、節博士が短く、記号の位置に意味があると判断できないモーラ分割式の節博士に付される場合は、節博士全体への記号と考え、後述する言語単位に対して付された記号とする。講式では長い節博士はあまり使用されないため、ほとんど使用されない。

#### B 軽音節に対して付された長短記号

図3 軽音節・節博士〔宝四〕

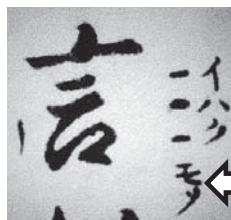


図4 軽音節・仮名〔宝四〕

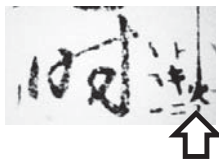
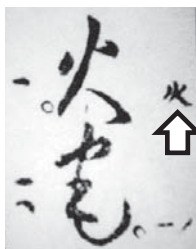


図5 軽音節・漢字〔宝四〕





長短記号の指示対象が、軽音節（1音節が1モーラにあたるような音節）である場合、ここに分類する。譜本上のどのような要素に対して付されるかによって、節博士に対して付されるもの（図3）と、仮名に対して付されるもの（図4）、漢字に対して付されるもの（図5）がある。

譜本上の要素として、節博士、仮名、漢字のいずれを対象として付されたものでも、言語単位としては軽音節に対応していると見る。これらは後に母音の無声化を考えると、詳しく論じる。

### C 重音節に対して付された長短記号

同様に、重音節（2モーラで1音節を構成する音節）に対して付された長短記号にも節博士、仮名、漢字に付されたものがある。本稿では重音節として認めるものを和語、漢語関係なく、2モーラ目として入声音、促音、撥音、長音、二重母音の第二要素をもつものとする。ただし二重母音については、ai, au, ei, eu, iu, ou, oi, uiとし、それ以外は二つの軽音節が組み合わされたものとして処理した。また、入声音が促音化していると思われる例については勿論のこと、室町時代以前の舌内入声字のうち語末に位置しているものは入声音を保っていると考え、重音節として扱った。その他の入声字は開音節化しているものと捉え、2つの軽音節として扱った。

重音節に付される記号は、重音節を前位モーラ、後位モーラに分割して、そのいずれかに施されるものと、重音節を分割せずに全体に施されるものとに分かれる。さらに記号が付される譜本上の要素として、仮名の場合と節博士の場合とがある。

#### C-1 重音節の前位モーラに対して付された長短記号

まず、重音節の前位モーラに記号を注記する例を示す。

図6では和語「カヘリミンガ」に含まれる重音節「ミン」の「ミ」に対応する節博士に対して「火」と注されている。

C-2 重音節の後位モーラに対して付された長短記号  
次に、重音節の後位モーラに記号を付す例を示す。

図7は和語「コフル」における「コフ」の「フ」に  
対して「長」が付されている。

C-3 重音節全体に対して付された長短記号

重音節を分割せずに全体として捉え、注記を与える  
記号をここに分類する。漢字に付されるもの、仮名に  
付されるもの、節博士に付されるものの三種がある。

図8は重音節の漢字全体に「延」が付される例、図  
9は和語「カタツテ」に含まれる重音節「タツ」に対  
して「長」が付される例、図10は重音節の漢字の左に  
施された節博士に対して「延」が付される例である。  
なお図9のような仮名に対する例は極めて珍しく、2  
例のみであった（もう一例は「キタテ」という促音無  
表記の重音節に対して付されたもの）。

D 複数音節に対して付された長短記号

単独の音節でなく、いくつかの音節にまたがる範囲  
に対して長短記号が付されている場合がある。訓読み  
する本行の漢字、音読みでも二音節に対応する漢字、

図6 重音節前位・節博士  
〔高四18〕

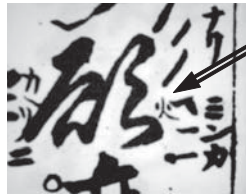


図7 重音節後位・仮名  
〔高四11〕

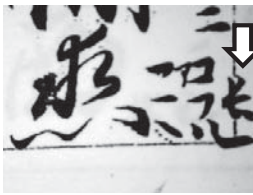


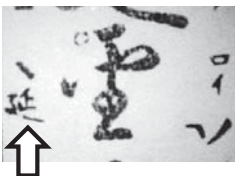
図8 重音節全体・漢字〔宝四〕



図9 重音節全体・仮名〔高四5〕



図10 重音節全体・節博士〔宝四〕



振仮名として使用された合字や漢字などに記号が付される場合が多い。

図11は本行の漢字に付され、訓「ステシ」と対応するもの、図12は同じく字音「セキ」と対応するもの、図13は振仮名として付された合字「メ」(シテ)と対応するものである。振仮名として付されるものには合字の他に踊り字や「奉(たてまつる)」があった。

### E音節間、またはモーラ間に対して付された長短記号

最後にこれまでと違い、単位そのものを対象にしたのではなく、単位と単位の間を指示対象としたと思しき例を挙げる。これらは譜の中では、字の間に付されている。

図14・図15のように本行の漢字の間に記号が配置される場合、スペースが広く漢字と記号の大きさが相当異なるため、明らかに字の間を意図して配されていることが分かり、図11・図12のような一字に対する記号との違いが分明である。一方振仮名の間に配置される場合、スペースが狭く仮名と記号の大きさが同じであるため、記号の注される対象として字の間を意図しているのか、前後どちらかの字を意図しているのかが明

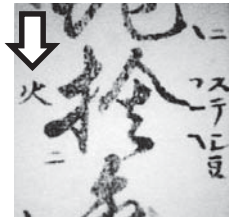


図11 複数音節・漢字(訓〔宝四〕)

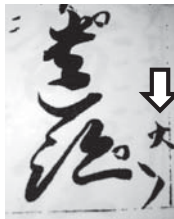


図12 複数音節・漢字(字音〔高四1〕)

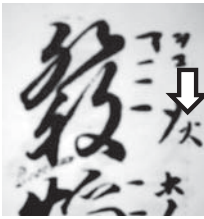


図13 複数音節・合字(高四1)

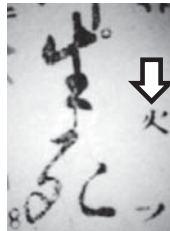


図14 音節間・漢字(字音)

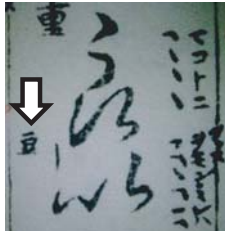


図15 モーラ間・漢字(訓)

確に判断できない。特に図4のように記号が仮名と仮名の中間に配置されている場合、これが前の字に対する記号であるか、字間を意図した記号であるかは、視覚上区別できないことになる。このような場合本稿の調査では、ここには分類せず前の字に対するものとみなして処理した。

#### 四 長短記号の分布

次に、先に分類したA、Eの類型のうち、母音の無声化に関わる「B軽音節に対して付される長短記号」について、母音の無声化との関連を探ってみたい。

まず、短音記号と長音記号について、記号が付されている音節の主母音と記号の種類について確認する。

短音記号の種類に関して表2を見ると、まず「火」が多く、「短」がそれに続く。音節主母音を見ると、i、aが多く、u、e、oが比較的少ない。

長音記号では表3によれば「持」の使用頻度が高い。音節主母音については短音記号よりも母音間の差が小さいが、a、oが多い。iについては5つの母音の中では3番目の頻度であり、長音記号に比べて短音記号におけるiの多さが際立つ結果となる。

次に、音節主母音を狭母音(i、u)と非狭母音(e、o、a)の二群に分けた上で、分布の特徴を検討する。なお、記号の種類は区別せず、一括して分析を行う。また後に詳しく述べるように、先行研究では母音の無声化の生起に関わる要因として、当

表2 短音記号 (音節主母音別)

記号種類 \ 音節主母音	音節主母音					計
	i	u	e	o	a	
火	109	35	46	49	81	320
短	42	10	9	19	41	121
消	1	0	2	0	1	4
計	152	45	57	68	123	445

表3 長音記号 (音節主母音別)

記号種類 \ 音節主母音	音節主母音					計
	i	u	e	o	a	
引	6	0	9	4	17	36
延	1	0	0	5	0	6
持	42	30	31	59	72	234
長	12	2	7	14	3	38
計	61	32	47	82	92	314

該母音の先行子音と後続子音による分布の差が指摘されている。本稿においても、前後にどのような音が接しているかという観点から狭母音に付された短音記号を観察すると、表4に見られるような結果が得られた。なお、一般に母音の無声化が起こりやすいとされる、当該母音が無声子音に挟まれた環境を二重棒線で囲ってある。

表4によれば、母音の無声化が起こりやすい位置（二重棒線の内側）に短音記号が付される割合は、197例中72例で37%であった。

二重棒線の外にも多くの用例が現れるが、このことは短音記号が母音の無声化を反映していることを直ちに否定するものではない。先に長短記号が音楽上の要請によって付されている場合があることを見てきたが、この表の中にも、母音の無声化とは関係の無い理由によって付された短音記号もあるはずだからである。

表4 狭母音に付された短音記号の音声環境

後続音 先行音	k	t	ts	s	h	f	g	d	b	dz	z	n	m	r	j	w	V	∅	計
k	3	1	1	1			1	1				8	2			3		4	25
t																			0
p																			0
ts	1	1							1			5				1		8	17
s	16	34		1				3	2			2	1	2		4		8	73
h	2	4										3		2		1			12
f	3	1		3									1		1				9
g			1															1	2
d																			0
b	3			1															4
dz					4		1	1										2	8
z																			0
n			2															16	18
m	2	2		2										3	2				11
r												2		2	1	1	1		7
j																			0
∅								1				1	2	1		6			11
計	30	43	4	8	4	0	2	6	3	0	0	21	6	10	4	16	1	39	197

そこで、以下では次のような手続きに沿って考察を進めたい。短音記号が付された例には、音楽的要請によって付されたものと、母音の無声化の影響で付されたものがあり、前者の分布に音声環境による偏りはないが、後者の分布には偏りがあると考ええる。音楽的要請によって付された記号の分布に偏りが無いことは、この要因で付された記号の音声環境における用例の多寡は、基本的には式文におけるその音節の使用頻度の高さに依存するということになる。この音楽的要請によって付されたものに、母音の無声化の影響によって付された短音記号が被さることになるが、それがあるとすれば、従来指摘されている様々な音声上の条件が、用例の分布に影響を及ぼすはずである。このような考え方に沿って分布状況を眺めたとき、式文における音節の使用頻度で説明できないような偏りが見出せるかどうか、確かめてみたい。

その方法として、二つの基準を採用する。一つは、天野・近藤（一九九六）による日本語におけるモーラの使用頻度の調査である。この調査によると、日本語におけるモーラの使用頻度は、長音、撥音を除けば、高い順に、/ku/ /ka/ /si/ /ki/ /u/ /i/ /nu/ /to/ /ta/ /su/となると言う。本稿で問題としている中世・近世語では多少事情が異なるだろうが、大きくは異なっていないと判断し、これらのモーラは使用頻度が高いことを前提に表を解釈することとする。

もう一つは、一般に狭母音よりも無声化が起こりにくいとされる非狭母音における短音記号の分布であり、これは無声化が起こらない場合の様相を反映するものとして扱う。これを狭母音の分布と比べることによって、短音記号の分布の特徴を見出したい。表5に非狭母音の分布を示す。

まず二重枠内に収まる用例数、すなわち無声化が起こりやすい環境における出現頻度ついてだが、狭母音では197例のうち72例（37%）であったのに対し、非狭母音では248例のうち32例（13%）であった。よって狭母音の方が、枠内の環境で短音記号が付されやすいということになる。これは、母音の無声化という言語的要因が、短音記号の付加に関わっていることを支持するものである。

では前後の音声環境から見た場合、狭母音に付された短音記号の分布上の特徴は非狭母音に付されたものとの間にど

のような相違を見出すことができるかを確認してみる。

まず先行子音から見ると、先行子音がk（カ行）の場合、狭母音よりも非狭母音の方が短音記号が付されやすく、先行子音がs（サ行）、hf（ハ行）の場合、非狭母音よりも狭母音の方が短音記号が付されやすい<sup>(1)</sup>ということが表から読み取れる。次に後続子音については、後続子音がk（カ行）、t（タ・テ・ト）の場合、非狭母音よりも狭母音に短音記号が付されやすく、後続子音がts（チ・ツ）、s（サ行）の場合、狭母音よりも非狭母音の方に短音記号が付されやすいということになる。

以上狭母音に付された短音記号の特徴を、非狭母音の分布との比較において把握しようとした。それによると、短音記号が付されやすい条件として、次の点が指摘できる。

表5 非狭母音に付された短音記号の音声環境

後続音 先行音	k	t	ts	s	h	f	g	d	b	dz	z	n	m	r	j	w	V	∅	計
k	4	8	1	2					4		1	12		10	1			5	48
t	1	3	2	2			4	1	1			2		2		2	1	41	62
p																		1	1
ts																			0
s	6			2								1			1			1	11
h				1				4				1		1				1	8
f								1				1							2
g	1					1		1				1	1	2		1		2	10
d		1			2							1		1					5
b																		2	2
dz											1								1
z															1				1
n	3		1	1					1			2		4		1		25	38
m		2	5	1			1				3	2	1					1	16
r	2	4						1	1							1		7	16
j																			0
w												2	1	1			2	14	20
∅	1	1										1		2		1		1	7
計	18	19	9	9	2	1	5	8	7	0	4	27	3	24	2	6	3	101	248

- ① 無声子音に挟まれているという環境に付されやすい。
- ② 先行子音に関して、摩擦音が前に位置する狭母音に付されやすい。
- ③ 後続子音に関して、破裂音が後ろに位置する狭母音に付されやすい。

これらは金井（一九八三）で得られた結果と基本的に一致しており、先に指摘した（一）（二）（三）の点が、結果に影響を及ぼさないことが確認された。すなわち、講式譜本一般において、短音記号の特徴として①から③が認められることになる。ただし本稿の調査との相違点として、記号の種類ごとに大きな差異が見出せないことが指摘できるが、これは調査の範囲を広げたことによるものと考ええる。また、狭母音と非狭母音の対比によって見た場合、先行音にkを持つ狭母音に短音記号が付される例の少なさが目立つことに注意を要するが、この問題については後述する。

さて、①については、無声化の一般的な条件と一致している。また邊（二〇一二、三二頁）によると、先行子音は摩擦音または破裂音の場合の方が破裂音の場合より無声化が起こりやすく、後続子音は摩擦音または破裂音の場合の方が摩擦音の場合より無声化が起こりやすいという研究結果が複数の先行研究によって認められると言う。この無声化の特徴は②③と一致するため、講式譜における短音記号は母音の無声化の影響を受けて付される場合があると考えられることができる。

## 五 アクセントとの関係

次に、「短音記号の一部は、母音の無声化が影響して付されたものである」という推定の蓋然性をさらに高めるために、具体例を挙げながらアクセントとの関係を見ておきたい。

多くの先行研究によって母音の無声化とアクセントとの関係が指摘されており、例えば桜井（一九九八）では、「無声化する拍のアクセントが高く、次の拍が低いときは無声化しにくい」としている。この、「核を担う母音は無声化しにくい」ということを念頭に置き、アクセントを反映していると言われる講式の節博士と、短音記号との関係を見る。



以下に、無声子音に挟まれた狭母音のうち、短音記号が付されたもの（表4 枠線内の例）を先行子音ごとに示す。なお用例は、最初に本行の漢字を大字で、振仮名を小字で示し、記号が付された部分に傍線を施した。声点のあるものについては漢字の次に小字で示し、括弧の中に記号の種類を記した。節博士が付してある例について、徴を、角を一、徴角を「、商を、宮を―で表し、節博士の付されていないモーラはφとした（括弧内は節博士が省略されているもの）。節博士に付した傍線は、短音記号が付されたモーラと直後のモーラを示す。また、アクセントが反映されないとされる中音の曲節に含まれる例には、（中音）と注記する。

○先行子音がkのもの（後続音ごと）に示す

k…苦<sup>平</sup>海<sup>上</sup>（火） $\diagdown\diagdown\diagdown$ 〔高四12〕

究<sup>平</sup>竟<sup>平</sup>（矢） $\phi\phi\phi$ 〔高四17〕

九<sup>平</sup>結<sup>入</sup>ッ（火） $\phi$ —〔高四13〕

t…来<sup>キ</sup>タル（火）—|—〔高四18〕

ts…窟<sup>入</sup>懸<sup>ク</sup>ツニ（火） $\diagdown\diagdown\diagdown$ 〔高四11〕

s…約<sup>ヤク</sup>セリ（火） $\diagdown\diagdown\diagdown$ 〔高四14〕

○先行子音がtsのもの

k…盡<sup>キ</sup>（火）—|—〔高四13〕

t…待<sup>マチ</sup>テ（火）—|—〔高四17〕

○先行子音がsのもの

k…加<sup>シ</sup>カノミナラス（火）—|— $\diagdown\diagdown\diagdown$ 〔高菩11〕

加<sup>シ</sup>カノミナラス（火）—|— $\diagdown\diagdown\diagdown$ 〔高天26〕

加<sup>シ</sup>カノミナラス（火）—|— $\diagdown\diagdown\diagdown$ 〔高天26〕

加<sup>シ</sup>カノミナラス（火）—|— $\diagdown\diagdown\diagdown$ 〔高天29〕

加 <small>カ</small> ノミナラス (消) 一一 \ 〔高四11〕	併 <small>ヒ</small> カシナカラ (火) 一一 (一一) \ 〔高他3〕
求モトメシカハ (火) 一一 \ 一一 〔高四5〕	然 <small>シ</small> カラハ (火) 一一 \ \ / (中音) 〔高四14〕
然 <small>シ</small> カラバ (火) 一一 \ \ / (中音) 〔高四20〕	然 <small>シ</small> カリト (火) 一一 \ \ \ \ 〔高僧8〕
然 <small>シ</small> カリト (火) 一一 \ \ \ 〔高天29〕	然 <small>シ</small> カリト (火) 一一 \ \ \ 〔高天29〕
然 <small>シ</small> カレハ (火) 一一 \ \ \ \ 〔高僧8〕	尔 <small>シ</small> カレハ (火) 一一 \ \ \ 〔高天29〕
空ムナシカラン (火) 一一 一一 チカ一 〔高四17〕	四 <small>シ</small> 平 <small>シ</small> 顧 <small>コ</small> (主) (火) 一一 \ \ 〔高四11〕
t. 被 <small>キ</small> ナラシ玉フ (火) \ \ \ \ \ \ \ \ \ 〔高四14〕	圓 <small>ウ</small> 滿 <small>平</small> シ玉へ (火) 一一 \ \ \ \ (中音) 〔高四21〕
舌 <small>シ</small> タラ (火) 一一 \ \ \ 〔高四52〕	朝 <small>ア</small> シタニ火 \ \ \ \ \ \ 一一 〔高四23書入〕
為 <small>シ</small> テ (火) 一一 〔高垂11〕	慶 <small>平</small> (平) シテ (火) 一一 〔寛四〕
婦 <small>上</small> 命 <small>平</small> シテ (矢) 一一 〔宝四〕	婦 <small>上</small> 命 <small>平</small> シテ (矢) 一一 〔高四20〕
婦 <small>上</small> 命 <small>平</small> シテ (火) 一一 〔高四20〕	圍 <small>上</small> 繞 <small>平</small> シテ (火) 一一 〔高四14〕
啼 <small>上</small> 哭 <small>入</small> シテ (火) 一一 〔高四14〕	変 <small>平</small> 異 <small>平</small> シテ (火) 一一 〔高四14〕
墮 <small>平</small> 落 <small>入</small> シテ (火) 一一 〔高四52〕	住持 <small>平</small> シテ (火) 一一 〔高四15〕
茂 <small>平</small> (モ) シテ (火) 一一 〔高四18〕	属 <small>入</small> シテ (火) 一一 〔高四14〕
落 <small>入</small> シテ (火) 一一 〔高四14〕	不 <small>又</small> シテ (火) 一一 φ 一一 〔高四14〕
間 <small>テ</small> ヒダニシテ (火) \ \ \ 一一 〔高四14〕	白 <small>マ</small> ウシテ (短) 一一 一一 〔高四17〕
白 <small>マ</small> ウシテ (短) 一一 一一 〔高四17〕	白 <small>マ</small> ウシテ (短) 一一 \ \ 一一 〔宝四〕
白 <small>マ</small> ウシテ (短) 一一 (一一) \ \ 一一 〔高四17〕	白 <small>マ</small> フシテ (短) 一一 \ \ 一一 〔高垂14〕
白 <small>マ</small> ウシテ (短) 一一 \ \ 一一 〔高四21〕	敬 <small>テイ</small> シテ (矢) 一一 \ \ \ 〔高天29〕
詣 <small>ケイ</small> シテ (火) 一一 (一一) \ 〔高垂7〕	降 <small>ケ</small> シテ (矢) 一一 \ \ 一一 〔高僧8〕
至 <small>イ</small> タシテ (火) 一一 一一 〔高四11〕	凝 <small>コラ</small> シテ (火) \ \ 一一 〔高四15〕

流<sup>ナカシテ</sup> (火) 一一一 [高四52]

無<sup>ナシト</sup> (火) 一〃一 [高垂11]

s..四<sup>垂</sup>所<sup>垂</sup> (火) ϕ [高垂11]

○先行子音がhのもの

k..光<sup>ヒカリヲ</sup> (矢) 一一〃 [高天29]

t..一<sup>ヒト</sup> (火) 一一 [高天5]

偏<sup>ヒトヘニ</sup> (火) 一一〃 [高天26]

○先行子音がfのもの

k..光<sup>ヒカリニ</sup> (火) 一一一 [高四52]

深<sup>アカシ</sup> (火) 〃〃〃 [高四13]

t..懷<sup>ヲトコロニ</sup> (火) 〃〃〃〃 [高四13]

s..不<sup>上</sup>思<sup>上</sup> (火) 〃〃〃 [高四11]

歩<sup>ヲシテ</sup> (火) 一一一 [高四17]

點<sup>モタシテ</sup> (火) 一一一 [高四52]

捨<sup>スレ</sup> (火) 〃〃 [高四11]

光<sup>ヒカリ</sup> (火) 一一〃 [高四14]

偏<sup>ヒトヘニ</sup> (火) 一一〃 [高天26]

偏<sup>ヒトヘニ</sup> (火) 一一〃 [高天26書入]

不<sup>垂</sup>可<sup>垂</sup>説<sup>ス</sup> (火) 一一一 [上渥]

臥<sup>フシ</sup> (火) 一一一 [高四14]

これらの例は全体としては先行音がsのもの、特に「しか」と「して」が多くを占める。一方で先行子音がkのものは、日本語におけるモーラの使用頻度からはより多くの用例が予想される環境であるにもかかわらず、sに比べて非常に少ないうえに、その多くを漢語が占める。なぜ先行子音としてkを持つものに短音記号が付されにくく、s、h、fを持つものには付されやすいのだろうか。

そもそも、日常語における母音の無声化が歌唱上に反映する場合、どのような状況が想定できるかを考えてみると、

無声化した母音をそのまま唱えるのは、現在伝承されている講式でも聞くことができないし、声帯振動なしには旋律が実現できないのであるから、日常語ではともかく、歌謡では現実的ではない。例えば、現代歌謡で促音に音符が付されているときには、促音部分を先行する母音で代替することがしばしば聞かれるが、母音の無声化の場合はその母音が母音なのだから、その部分に音程を与える手段としてもっとも考えやすいのは、無声化せずに発声することである<sup>(12)</sup>。よって、先行音にkを持つ狭母音に短音記号が付されにくいのは、日常語で無声化が起こっていたとしても、歌謡として実現するときには無声化せずに発声していたため、短音記号が付されなかったという解釈を採りたい。

すると逆に、先行音にs、h、fを持つ狭母音の場合に短音記号が付されるのはなぜかという点が問題となる。川上(一九七七)は無声化したモーラの音声的実態として「き、び、く、ぶ、しゅ、ちゅ」は無声母音で実現するが、「し、ち、ひ、す、つ、ふ」は「一般に無声母音すらもたない」とする(たとえば、「あした」は「[a][sita]」のように実現する)。本稿の調査では、このうち後者に短音記号が付されやすいということになる。このような場合、無声化が起こらない場合との聞き取りの印象の差が大きいので、講式の読誦者にとつて、特に注意が向きやすいモーラであったのではないかと予想される。ただし、講式の読誦において一つのモーラは日常語よりも長く唱えられるため、母音を全く発声しないと旋律が破綻してしまう。そこで、当該モーラをできるだけ自分の聞き取った印象に近い形で歌謡上に実現しようとした結果、母音を短く唱えるという方法が採られたのではないだろうか。すなわち、短音記号は無声化を反映しているとはいっても、歌謡上で実際に無声化が行なわれたわけではなく、無声化が意識されやすい環境において母音が短く唱えられ、それが短音記号の分布に多く表れていると考えておく。

さて、節博士によってアクセントと無声化との関係について確認しておく。先引の用例の節博士を、＼は高、一および「は低として解釈すると、短音記号が付されたモーラと、その直後のモーラのアクセントが高低(＼一)となるものは、先に挙げた72例のうち次の5例である。

白(マウシ)テ 一 一 (宝四)、白(マウシ)テ 一 一 (一) 一 一 (高四17)、白(マウシ)テ 一 一 一 (高垂14)

白<sup>マウシテ</sup> ― ― ― (高四21)、無<sup>ナシト</sup> ― ― ― (高垂11)

このようにアクセントとして高低となるものは少数であり、大部分が「マウシテ」に集中することから、アクセント核には短音記号が付されにくいという特徴を見出すことができる。この特徴は、母音の無声化の特徴と一致するものであり、短音記号が無声化を反映しているという推定を支持するものである。

### まとめ

本稿では、講式譜本に見られる長短記号を収集し、その使用状況の歴史の変遷と、母音の無声化との関係を考察した。以下に本稿の論旨をまとめる。

まず日本語で唱える声明の譜本における長短記号の使用を概観すると、天台宗では片仮名交じり文の譜本における和語への施注から、真言宗では漢文の譜本における漢語への施注から使用が始まり、全体に広がったものと考えられる。

また、金井（一九八三）によって指摘された、短音記号が母音の無声化を反映しているという説を検証した結果、講式譜をさらに広汎に調査しても短音記号の音声環境上の分布と無声化の分布とに類似点が認められることが確かめられた。さらに、無声化生起に関わるアクセントの条件が、節博士から推定されるアクセントと短音記号の対応にも認められる。よって講式譜に見られる短音記号は、基本的に音楽的要請によって付されているものの、結果的に言語上の現象である母音の無声化を反映していると結論づけられる。

### 注

(1) 「声明の謠ひ物には、梵語のもの之を漢譯したものと、漢譯を我が國語に改めたものと國語で新作したものとの四種あつて、用語の上からは梵讚・漢讚・和讚の三に分つべきである。」(高野、一九二六)

- (2) 「わが日本の声楽は平曲を限界として歌いものから語りものへと変遷しているのがその大きな流れ方である。わが声明においてもこれと同じ流路をたどる。例えば唄、散華等のごときは声音の曲節のみを味わう「歌う声明」で、御影供表白、祭文（表白と時代は異なるが）のごときは曲節と歌詞の内容とをかね 味わうものではあるが、講式、和讃等に比すれば、情熱を喚起しえない感があるので、私は特にこれらを「読む声明」とする。即ち、「歌う声明」から「語る声明」へ移りゆく前駆をなすものである。講式、和讃のごときは、曲節と歌詞の内容を同時に味わって、一種の情熱を喚起しうるものであるから、これらを「語る声明」とする。」(岩原、一九九七、二五頁)
- (3) 声明曲がいくつか集成されている声明集の類の中に収載されているものも含む。
- (4) 「短」には厳密に言えば「短」の他に「矢」「豆」が見られる。これらは単純に略号と見られ、特に機能上差がないようなので、一括して「短」として扱う。同様に、「火」には「カ」「ヒ」が、「消」には「ケス」が、「引」には「ヒク」が、「持」には「モツ」「モ」がそれぞれ含まれる。
- (5) 記号「火」の内容については、金井（一九八三、一七二―一七五頁）に詳論がある。ハヤク云フ印二用ヒラレタル火ハ火急ノ略、急トモ書クンという『昭和新訂・四座式』における言及が紹介されている。また、「歌唱楽譜に用いた例は少ないようである」とあるが、管見では鍋島報效会蔵『催馬楽譜』（十一世紀成立）にも「伊<sup>火</sup>天安<sup>安</sup>己<sup>己</sup>末<sup>末</sup>引<sup>引</sup>安<sup>安</sup>々々」（いで我が駒）と見え、声明譜における「火」はこれらの影響の下に成立したと推測される。
- (6) 他の記号では和語の方が圧倒的に多く、例えば「持」では和語239例、漢語47例、梵語2例であった。
- (7) 声明における割り音については、浅田（二〇〇四）および浅田（二〇一一）で触れた。本稿では基本的に割って発音することを想定している。
- (8) 漢語については、沼本（一九九七）によれば、舌内入声音・唇内入声音の場合、無声子音前で促音化し、喉内入声音の場合、原則として子音「k」の前でのみ促音化するとされ、この条件に合うものを促音化しているものとした。
- (9) 金井（一九八三）では「消」は無声化を反映する記号と判断され、「火」よりも無声化を反映する率が高いという

結果が得られている。しかしながら本稿の調査の範囲においては、すべての例において前後に有声音が位置しないという特徴があるものの、e および a のような非広母音にも付されており、特に「火」「短」との違いは見出されなかった。以下に「消」の用例を挙げる。

加シカノミナラス〔高四11〕、以テ〔高四11〕、須シハラクアツテ〔高四11〕、者ハ〔高四12〕

- (10) 前後の音声環境については、口蓋化による子音の音声的な差は無視し、原則として拗音・イ段音・エ段音はア段音・ウ段音・オ段音と同じ子音として扱った。チ・ツ、ヂ・ヅは室町時代中期までは破裂音とし t、d で、室町時代後期以降は破擦音とし ts、dz で表した。ザ行音は室町時代以前を摩擦音とし z で、江戸時代以降を破擦音とし dz で示す。ハ行音は室町時代以前の例は両唇摩擦音とみなして f で、江戸時代以降の例は声門摩擦音とみなして h で表した(ただしフのみ f)。先行子音のない場合は先行音を ø とし、句末の場合は後続音を ø で示した。助詞が直後にある場合は、助詞の先頭子音を後続音とみなした。子音は無声阻害音、有声阻害音、共鳴音の順で掲げ、母音は V として一括して示した。ただしパ行音は後続音に現れる例がなかったので、掲出しなかった。またカ行・ガ行合拗音は k、g として扱った。

- (11) タ行音については、狭母音は破擦音 (ts)、非狭母音は破裂音 (t) であるため、直接比較することを避けた。
- (12) 田中(二〇〇八)は日本歌謡曲(Jポップ)における韻律構造の分析の中で、「音楽では、基本的にそれら(筆者注:母音の無声化)が補正され、無声化環境にある(i)u)も (æ)eo)と同様)明瞭に発声される」とする。
- (13) 桜井(一九七六)などを参照した。また、／、―はアクセントを反映していないとし、検討の対象から外した。

## 参考文献

浅田健太郎(一九九九)「声明資料における補助記号「火」について―音楽譜における言語事象の現れの一例として―」  
鎌倉時代語研究会『鎌倉時代語研究第二十二輯』武蔵野書院、二二三―二四二頁。

浅田健太郎(二〇〇四)「漢字音における後位モーラの独立性について―仏教音楽譜から見た日本語の音節構造の推移―」

『音声研究』八巻二号、三五一—四五頁。

浅田健太郎（二〇一一）「声明譜における発音注記の「中音」について」『島大國文』三三三号、二九一—五二頁

天野成昭・近藤公久（一九九六）「単語親密度によって分類した日本語単語およびモーラの統計的分布」『電子情報通信学会技術研究報告SPC音声』九六巻一六〇号、九一—一五頁。

岩原諦信（一九九七）『増補校訂声明の研究』東方出版。

金井英雄（一九八三）「母音無声化の資料としての声明」金田一春彦博士古稀記念論文集編集委員会『金田一春彦博士古

稀記念論文集第一集』三省堂、一六三—一九六頁。

川上藁（一九七七）『日本語音声概説』桜楓社。

金田一春彦（一九六四）『四座講式の研究—邦楽古曲の旋律による國語アクセント史の研究各論（一）—』三省堂。

桜井茂治（一九七六）「宝暦版『四座講式』所載のアクセント」『中世國語アクセント史論考』桜楓社、二三八—二七九頁。

桜井茂治（一九九八）「共通語の発音で注意すること」NHK放送文化研究所編『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会、二二七—二三一頁。

高野辰之（一九二六）『日本歌謡史』春秋社。

田中真一（二〇〇八）「言語の韻律構造と歌のリズム・メロデー」『日本語学』二七巻四号、一八一—二八頁。

沼本克明（一九九七）『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院。

邊姫京（二〇一一）『日本語狭母音の無声化—共通語普及の指標として—』（東京大学大学院博士論文）。

## 調査資料

おおむね時代順に掲載する。所蔵、書名の他、奥書、刊記の見えるものは、書写年、刊年を示した。なお、高野山大学附属高野山図書館（二〇〇一）『高野山講式集』（小林写真工業株式会社）所載のものについては、書名の次にDVD内



にある部立ておよび番号を（ ）に示す。流派については、天台宗系統か、真言宗系統かを記す。長短記号の見える資料には、記号の種類を記した上で、用例掲出の際に使用した資料名の略号を「 」の中に付した。金沢文庫蔵の譜本については、神奈川県立金沢文庫編（一九八四）（一九八六）『金沢文庫資料全書』第七巻・第八巻（便利堂）に依った。

鎌倉時代○金沢文庫蔵「聖宣本聲明集」、仁治三年（1242）写、天台、火〔金集〕。○金沢文庫蔵「聲明集文保二年仮名曆紙背」、写、天台、火〔金文〕。○前田尊経閣文庫蔵声明類聚、写、天台、火〔前類〕

南北朝時代○随心院蔵佛名會法則（第65函45号）、写、天台、引〔随佛〕。○随心院蔵聲明集（第6函1号）、写、天台、火〔随集〕。○東京大学国語研究室蔵大慈院本涅槃講式、写、真言、火〔東大〕。○上野学園日本音楽史研究所蔵涅槃講式、写、真言、火引〔上涅槃〕。○随心院蔵理趣三昧法則（第65函45号）、写、真言、火〔随理〕。○勝林院蔵聲明集（二卷抄）、写、天台、火引〔勝集〕

室町時代○東京大学国語研究室蔵涅槃講式付舍利講式（特第1号34冊）、写、真言、火〔東涅槃〕。○上野学園日本音楽史研究所蔵弁財天講式、写、真言、火持〔上弁〕。○筑波大学図書館蔵四座講式、写、真言、持〔筑四〕。○高野山大学図書館蔵阿弥陀講式（如来部1）、写、真言、持〔高如1〕。○高野山大学図書館蔵薬師講式（如来部10）、享禄三年（1530）写、真言、火〔高如10〕。○高野山大学図書館蔵地藏講式（菩薩部8）、天正十年（1582）写、真言、火〔高菩8〕。○高野山大学図書館蔵弁財天講式（天部18）、写、真言、火〔高天18〕。○高野山大学図書館蔵弘法大師講式（高僧部3）、天文五年（1536）写、真言、火〔高僧3〕。○高野山大学図書館蔵神祇講式（神祇部6）、写、真言、火延〔高神6〕。○高野山大学図書館蔵朔日羅漢講式（四座講式2）、天文六年（1537）写、真言、火〔高四2〕。○高野山大学図書館蔵仏生會式（その他32）、天正十八年（1590）写、真言、火〔高他32〕。○高野山大学図書館蔵涅槃講式・舍利講式（四座講式52）、写、真言、火持引〔高四52〕。○高野山大学図書館蔵往生講式（その他3）、写、真言、火〔高他3〕

- 江戸時代○上野学園日本音楽史研究所蔵修正大導師作法、写、天台、火〔上修〕。○宝暦版四座講式〔島根大学蔵〕、刊、真言、火短延持引〔宝四〕。○寛永版四座講式〔随心院蔵第65函29号〕、写、真言、火持〔寛四〕。○京都大学蔵葉師講式、写、真言、火〔京葉〕。○寛保版魚山薑芥集〔島根大学蔵〕、刊、真言、短長持〔寛魚〕。○正保版魚山私抄〔国立国会図書館蔵〕、刊、真言、短長持〔正魚〕。○高野山大学図書館蔵毘沙門講式〔天部13〕、宝暦四年〔1754〕写、真言、火持〔高天13〕。○高野山大学図書館蔵弁財天講式〔天部19〕、元和八年〔1622〕写、真言、火〔高天19〕。○高野山大学図書館蔵摩訶迦羅天講式〔天部29〕、宝暦三年〔1753〕写、真言、火短持引〔高天29〕。○高野山大学図書館蔵毘沙門講式〔天部14〕、宝暦六年〔1756〕写、真言、持〔高天14〕。○高野山大学図書館蔵阿弥陀講式〔如来部5〕、文化七年〔1810〕写、真言、持〔高如5〕。○高野山大学図書館蔵阿弥陀講式〔如来部6〕、写、真言、持〔高如6〕。○高野山大学図書館蔵地藏講式〔菩薩部11〕、写、真言、火〔高菩11〕。○高野山大学図書館蔵千手觀音講式〔菩薩部19〕、写、真言、持引〔高菩19〕。○高野山大学図書館蔵弥勒講式〔菩薩部30〕、文政六年〔1823〕刊、真言、持〔高菩30〕。○高野山大学図書館蔵不動講式〔明王部5〕、写、真言、短〔高明5〕。○高野山大学図書館蔵不動講式〔明王部8〕、写、真言、引〔高明8〕。○高野山大学図書館蔵三天講会式〔天部5〕、写、真言、火持〔高天5〕。○高野山大学図書館蔵弁財天講式〔天部25〕、写、真言、持〔高天25〕。○高野山大学図書館蔵弁財天講式〔天部26〕、刊、真言、火短持引〔高天26〕。書入、写、真言、火短持〔高天25書入〕。○高野山大学図書館蔵弁財天講式〔天部31〕、刊、真言、火短持引〔高天31〕。○高野山大学図書館蔵柿本講式〔垂迹部2〕、文化十一年〔1814〕写、真言、火持引〔高垂2〕。○高野山大学図書館蔵丹生明神講式〔垂迹部7〕、正徳三年〔1713〕写、真言、火短持〔高垂7〕。○高野山大学図書館蔵明神講式〔垂迹部11〕、写、真言、火持〔高垂11〕。○高野山大学図書館蔵明神講式〔垂迹部14〕、明和五年〔1768〕刊、真言、短〔高垂14〕。○高野山大学図書館蔵明神講式〔垂迹部15〕、写、真言、短引〔高垂15〕。○高野山大学図書館蔵弘法大師講式〔高僧部4〕、天保五年〔1834〕刊、真言、持〔高僧4〕。○高野山大学図書館蔵弘法大師誕生会式〔高僧部8〕、刊、真言、火短引〔高僧8〕。○高野山大学図書館蔵聖徳太子讚歎式〔高僧部12〕、写、真言、短持〔高僧12〕。○高野山大学図書館蔵神祇講式〔神祇

部9)、写、真言、持〔高神9〕。○高野山大学図書館蔵光明真言講式(その他12)、写、真言、短持引〔高他12〕。○高野山大学図書館蔵仏生講式(その他33)、文化十一年(1814)刊、真言、火〔高他33〕。○高野山大学図書館蔵龍王講式(その他42)、文化十二年(1815)写、真言、火短持引〔高他42〕。○高野山大学図書館蔵朔日羅漢講式(四座講式5)、写、真言、火長持〔高四5〕。○高野山大学図書館蔵朔日羅漢講式(四座講式6)、写、真言、短〔高四6〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(遺跡講式)(四座講式11)、延宝八年(1680)写、真言、火短長持〔高四11〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(舍利講式)(四座講式12)、延宝八年(1680)写、真言、火短延長持〔高四12〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(涅槃講式)(四座講式13)、延宝八年(1680)写、真言、火延長持〔高四13〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(涅槃講式)(四座講式14)、写、真言、火短延長持〔高四14〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(舍利講式)(四座講式16)、写、真言、火長持〔高四16〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(四座講式17)、写、真言、火短延長持〔高四17〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(遺跡講式)(四座講式18)、刊、真言、火短持引〔高四18〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(舍利講式)(四座講式19)、刊、真言、短持引〔高四19〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(涅槃講式)(四座講式20)、刊、真言、火短延持〔高四20〕。○高野山大学図書館蔵四座講式(羅漢講式)(四座講式21)、刊、真言、火短延持〔高四21〕。○高野山大学図書館蔵四座講式「一」(四座講式23)書入、写、真言、火持〔高四23書入〕。○高野山大学図書館蔵涅槃講式(四座講式50)後筆、写、真言、火短長持引〔高四50後筆〕

〔付記〕 本稿で利用した声明譜の原本調査に際しては、各寺院、図書館、研究室の関係各位に格別のご配慮を賜った。そのご厚情に対し、ここに記して感謝申し上げます。なお本稿は、平成二十五年科学研究費補助金(若手研究(B))による研究成果の一部である。